

続野人生計事

芥川龍之介

青空文庫

一 放屁

アンドレエフに百姓が鼻糞はなくそをほじる描写べうしやがある。フランスに婆さんが小便をする描写がある。しかし屁へをする描写のある小説にはまだ一度も出あつたことはない。

出あつたことのないといふのは、西洋の小説にはと云ふ意味である。日本の小説にはない訣わけではない。その一つは青木健作あをきけんさく氏の何なんとかいふ女工の小説である。駈落ちかけおをした女工ふたりが二人、干ほしわ藁らか何かの中に野宿する。夜明よあけに二人とも目がさめる。一人ひとりがふうとおならをする。もう一人がくすくす笑ひ出す——たしかそ

んな筋だつたと思ふ。その女工の屁をする描写は予の記憶に誤りがなければ、甚だ上品に出来上つてゐた。予は此の一段を読んだ為に、こんにち今日もなほ青木氏の手腕に敬意を感じてゐる位なものである。

もう一つは なかとがはきちじ中戸川吉一氏の何とか云ふ不良少年の小説である。これはつい三四箇月以前、サンデー毎日に出てゐたのだから、知つてゐる読者も多いかも知れない。不良少年に口説かれた女が際きわどい瞬間におならをする、その為に折角せつかくかも醸されたエロチツクな空気が消滅する、女は妙につんとしてしまふ、不良少年も手が出せなくなる——だいたい大体かう云ふ小説だつた。この小説も巧みに書きこなしてある。

青木氏の小説に出て来る女工はかならず必しもおならをしないでよも好い。しかし中戸川氏の小説に出て来る女はいや嫌でもおならをする必要がある。しなれば成り立たない。だから屁はへ中戸川氏なかとがはを得たのち後始めて或重大な役目を勤めるやうになつたと云ふべきである。

しかしこれは近世のことである。うぢしふるものがたり宇治拾遺物語によれば、藤

うだいながんたたいへ大納言忠家も、「いまだてんじやうびと殿上人におはしける時、びびし

いろこのき色好みなりける女にようぼう房よふとももの云ひて、夜更くるほどに月は

昼よりもあかかりけるに」たへか兼ねてひき寄せたら、女は「あな

あさまし」と云ふひやうし拍子ひやうしに大きいおならを一つした。忠家はこの

屁へを聞いた時に「心うきことにも逢ひぬるかな。世にありて何か

はせん。出しゅつけ家せんせん」と思ひ立つた。けれども、つらつら考へて

見れば、何も女が屁をしたからと云つて、坊主ばうずにまでなるには当りさうもない。忠家は其処そこに気がついたから、出家することだけは見合せたが、そうそうその場は逃げ出したさうである。すると中戸川氏の小説も文学史的に批評すれば、前人未発と云ふことは出来ない。しかし断えたるを継ついだ功は当然同氏に属ぞくすべきである。この功は多分中戸川氏自身の予想しなかつたところであらう。しかし功には違ひないから、序ついでに此処ここに吹ふい聴ちやうすることにした。

二 女と影

紋服を着た西洋人は滑稽こっけいに見えるものである。或は滑稽に見

える余り、西洋人自身の男をとこぶり振などは滅多めつたに問題にならないものである。クロオデル大使の「女と影」も、云はば紋服を着た西洋人だつたから、一笑に付せられてしまつたのであらう。しかし当人の男ぶりは紋服たると燕尾服えんびふくたるとを問はず独立に美醜を論ぜらるべきである。「女と影」に対する世評は存ぞんぐわい外がいこの点に無頓着むとんちやくだつたらしい。さう男ぶりを閑却するのは仏蘭西人たる大使にも気の毒である。

試みにあの作品の舞台をペルシアか印度インドかへ移して見るが好よい。桃ももの花の代りに蓮はすの花を咲かせ、古風な侍さむらひの女房の代りに王女か何か舞はせたとすれば、毒舌に富んだ批評家と雖いへども、今日こんにちのやうに敢然とは鼎かなへの軽重を問はなかつたであらう。況いはんやあの作品に

さへ三歎の声を惜まなかつた鑑賞上の神秘主義者などは勿論無上の法悦はふえつの為に即死を遂げたのに相違あるまい。クロオデル大使は紋服の為にこの位損な目を見てゐるのである。

しかし男ぶりは姑しぼらく問はず、紋服そのものの感じにしても、全然面白味おもしろみのない訣わけではない。成程なるほど「女と影」なるものは日本

のやうな西洋のやうな、妙にとんちんかんな作品である。けれどもあのとんちんかんのところは手腕の鈍にぶい為に起つたものではない。日本とか我我日本人の芸術とかに理解のない為に起つたものである。虎を描かかうと思つたのが猫になつてしまつたのではない。猫も虎も見わけられないから、同じやうに描かいてすましてゐるのである。思ふに虎になり損そこなつた彼は小説家になり損そこなつた批評

家のやうに、義理にも面白おもしろいとは云はれたものではない。けれども猫とも虎ともつかない、何か怪しげな動物になれば、古来野や師しの儲まうけたのはかう云ふ動物恩恵である。我我は面白おもしろいと思はな
いものに一銭の木戸銭きどせんをも抛なげつ筈はない。

これは「女と影」ばかりではない。「サムラヒ」とか「ダイミヤウ」とか云ふエレディアの詩でも同じことである。ああ云ふ作品は可笑をかしいかも知れない。しかしその可笑をかしいところに、善よく云へば阿蘭陀オランダの花くわびん瓶びんに似た、悪く云へばサムラヒ商会の輸出品に似た一種のシヤルムがひそんである。このシヤルムさへ認めないのは偏へん狭けふの譏そしりを免まぬかかないであらう。予は野口米次郎のぐちよねじらう氏の如ごとき、或は郡虎彦こほりとらひこ氏の如ごとき、西洋に名を馳はせた日本人の作品も、

その名を馳せた一半の理由はこのシャルムにあつたことを信じて
 る。と云ふのは勿論両氏の作品に非難を加へようと云ふのでは
 ない。寛大な西洋人に迎へられたことを両氏の為に欣きん幸かうとし、
 偏へん狭けふな日本人に却しりぞけられたことをクロオデル大使の為に遺憾ゐかんと
 するのである。

灰そく聞ぶんするところによれば、クロオデル大使はどう云わふ訣けか、

西洋ばん輓きん近きんの芸術に対する日本人の鑑賞力に疑惑を抱いてゐるさ
 うである。まことに「女と影こゝろ」の如きも、予などの批評を許さな
 いかも知れない。しかし時の古こ今こんを問はず、わが日本の芸術に対
 する西洋人の鑑賞力は——予は先夜細川ほそかは侯こうの舞台に桜間金太さくらまきんた
 郎らう氏の「すみだ川」を見ながら欠伸あくびをしてゐたクロオデル大使

に同情の微笑を禁じ得なかつた。すると半可通はんかつうをふりまはすことは大使も予もお互ひ様である。仏蘭西フランスの大使クロオデル閣下、どうか悪あしからずお読み下さい。

三 ピエル・ロテイの死

ピエル・ロテイが死んださうである。ロテイが「お菊夫人きく」
 「日本の秋」等の作者たることは今更辯じ立てる必要はあるまい。
 小泉八雲こいづみやくもひとり一人を除けば、兎とに角ロテイかくは不二山ふじさんや椿つばきやベベ・ニ
 ツポンを着た女と最も因縁いんねんの深い西洋人である。そのロテイを
 失つたことは我我日本人の身になるとまんざら人ごとのやうに思

はれない。

ロテイは偉い作家ではない。同時代の作家と比べたところが、余り背せいの高い方ではなささうである。ロテイは新らしい感覚描写を与へた。或は新らしい抒情詩じよじやうしを与へた。しかし新らしい人生の見かたや新らしい道徳は与へなかつた。勿論これは芸術家たるロテイには致命傷でも何なんでもないのに違ひない。提ちやうちん燈は火さへともせれば、敬意を表して然るべきである。合羽かっぱのやうに雨がしの凌げぬにしろ、軽蔑けいべつして好よいと云ふものではない。しかし雨が降つてゐるから、まづ提燈は持たずとも合羽の御厄ごやくかい介にならうと云ふのはもとより人情の自然である。かう云ふ人情の矢やおもて面には如何いかなる芸術至上主義も、提燈におしなさいと云ふ忠告と同様、

利き目のないものと覚悟せねばならぬ。我我は土砂降りどしゃぶりの往来に似た人生を辿る人足たどである。けれどもロテイは我我に一枚の合羽をも与へなかつた。だから我我はロテイの上に「偉い」と云ふ言葉を加へないのである。古来偉い芸術家と云ふのは、——勿も論合羽ちろんの施行せぎやうをする人に過ぎない。

又ロテイはこの数年間、仏蘭西文壇フランスの「人物」だつたにせよ、仏蘭西文壇の「力」ではなかつた。だから彼の死も實際的には格別影響を及ぼさないであらう。唯我我日本人は前にもちよいと云つた通り、美しい日本の小説を書いた、当年の仏蘭西の海軍将校ジュリアン・ヴィオオの長逝ちやうせいに哀悼あいたうの念を抱いてゐる。ロテイの描いた日本はヘルンの描いた日本よりも、真しんを伝へない画ぐ

図^{わと}かも知れない。しかし兎^とに角^{かく}好画図たることは異論を許さない
 事実である。我々の姉妹たるお菊さんだの或は又お梅さんだのは、
 ロテイの小説を待^{のち}つた後、巴^{パリ}里の敷石の上をも歩むやうになつた。
 我^{そこ}は其処にロテイに対する日本の感謝を捧げたいと思ふ。なほ
 ロテイの生涯は大體左に示す通りである。

千八百五十年一月十四日、ロテイはロシユフオオルで生れ、十
 七歳の時、海軍に入り、千九百六年大佐になつた。大佐になつた
 のは数へ年で五十七の時である。

最初の作は千八百七十九年、即三十歳の時^{おほやけ}公にした〔Aziyade〕
 である。後ち一年、千八百八十年に Rarahu を出して一躍流行児
 になつた。これは二年の後^{のち}「ロテイの結婚」と改題再刊されたも

のである。

かの「お菊さん」は千八百八十七年に、「日本の秋」は八十九年おほやけに公おほやけにされた。

アカデミイの会員に選ばれたのは九十一年、数へて四十二歳の時である。

彼は、国際電報の伝ふるところによると、十日アンダイエで死んだのである。時に歳七十三。

四 新緑の庭

桜 さつぱりした雨あまあが上りです。もつと尤も花がくの萼は赤いなりについ

てゐますが。

椎^{しひ} わたしもそろそろ芽^めをほごしませう。このちよいと鼠がかつた芽をね。

竹 わたしは未^{いま}だに黄^{わう}疸^{だん}ですよ。……

芭蕉^{ばせう} おつと、この緑のランプの火屋^{ほや}を風に吹き折られる所だつた。

梅 何だか寒^{さむ}気がすると思つたら、もう毛虫がたかつてゐるん

だよ。

八つ手^やで 痒^{かゆ}いなあ、この茶色の産毛^{うぶげ}のあるうちは。

百日紅^{さるすべり} 何、まだ早うござんさあね。わたしなどは御覧の通

り枯枝ばかりさ。

霧島躑躅^{きりしまつづじ} 常^{じやう}——常^{じやう}談^{だん} 云つちやいけない。わたしなどは
あまり忙^{せは}しいものだから、今年^{ことし}だけはつい何時^{いつ}にもない 薄^{うす}紫^{むらさき}
に咲いてしまった。

霸王樹サボテン どうでも勝手にするが好いや。おれの知つたことぢやなし。

石榴ざくろ ちよいと枝一面に蚤のみのたかつたやうでせう。

苔こけ 起きないこと？

石 うんもう少し。

楓かへで 「若わか楓かへで 茶色になるも一ひと盛りさか」——ほんたうにひと盛りです。もう今は世間並みに唯水水しい鶉ひわいろ色です。おや、障し子やうじに灯ひがともりました。

五 春の日のさした往來わうらいをぶらぶら一人歩いてゐる

春の日のさした往來をぶらぶら一人ひとり歩いてゐる。向うから来るのは屋根屋の親かた。屋根屋の親かたもこの節は紺の背広なかをに中折帽なげぼうをかぶり、ゴムか何かの長靴ながぐつをはいてゐる。それにしても大きい長靴だなあ。膝——どころではない。腿ももも半分がたは隠れてゐる。ああ云ふ長靴をはいた時には、長靴をはいたと云ふよりも、何かの拍子ひやうしに長靴の中へ落つこつたやうな気がするだらうなあ。

顔かほなじみ馴染の道具屋を覗のぞいて見る。正面の紅木こうぼくの棚たなの上に虫明むしあ

けらしい徳利とくりが一本。あの徳利の口などは妙に猥褻わいせつに出来上つてゐる。さうさう、いつか見た古備前こびぜんの徳利の口もちよいと接吻せつぷんしたかつたつけ。鼻の先に染めつけの皿が一枚。藍色あゐいろの柳の枝垂しだれた下にやはり藍色の人が一人、莫迦ぼかに長い釣竿つりざをを伸ばしてゐる。誰かと思つて覗のぞきこんで見たら、金沢かなざわにゐる室むろふ生犀星さいせい！

又ぶらぶら歩きはじめる。八百屋やほやの店に慈姑くわゐがすこし。慈姑の皮の色は上品だなあ。古い泥七宝でいしつぼうの青に似てゐる。あの慈姑くわゐを買はうかしら。嘘うそをつけ。買ふ氣のないことは知つてゐる癖に。だが一体どう云ふものだらう、自分にも嘘をつきたい氣のするのは。今度は小鳥屋。どこもかしこも鳥籠だらけだなあ。おや、御ご

亭主ていしゅも氣樂さうに山雀やまがらの籠の中に坐つてゐる！

「つまり馬に乗つた時と同じなのさ。」

「カントの論文に崇たたられたんだね。」

後ろからさつきと通りぬける制服制帽の大学生が二人ふたり。ちよい

と聞いた他人の会話と云ふものは氣違ひの会話に似てゐるなあ。

この辺へんそろそろ上り坂のぼ。もうあの家の椿などは落ちて茶色に變つ

てゐる。尤も崖もつと側がけの竹藪きはは不相變あひかはらず黄ばんだままなのだ……

おつと向うから馬が来たぞ。馬の目玉は大きいなあ。竹藪も椿も

己おれの顔もみんな目玉の中に映うつつてゐる。馬のあとからはモンシロ

蝶。

「生ミタテ玉子タマゴアリマス。」

アア、サウデスカ？　ワタシハ玉子ハ入りマセン。——春の日のさした往来をぶらぶら一人歩いてゐる。

六 霜夜

霜夜しもよの記憶の一つ。

いつものやうに机に向つてゐると、いつか十二時を打つ音がする。十二時には必ず寝ることにしてゐる。今夜もまづ本を閉じ、それからあした坐り次第、直すぐに仕事にかかれるやうに机の上を片づける。片づけると云つても大したことはない。原稿用紙と入いりよ用の書物とを一まとめに重ねるばかりである。最後に火鉢の火

の始末しまつをする。はんねらの瓶かめに鉄瓶てつびんの湯をつぎ、その中へ火を一つづつ入れる。火は見る見る黒くなる。炭の鳴る音も盛んにする。水蒸気ももやもや立ち昇る。何か楽しい心もちがする。何か又はかない心もちもする。床とこは次の間まにとつてある。次の間も書齋も二階である。寝る前には必ず下へおり、のびのびと一人ひとり小便をする。今夜もそつと二階を下おりる。家族の眼をさまさせないやうに、出来るだけそつと二階を下りる。座敷の次の間に電燈がついてゐる。まだ誰か起きてゐるなと思ふ。誰が起きてゐるのかしらとも思ふ。その部屋の外そとを通りかかると、六十八になる伯母をばが一人ひとり、古い綿わたをのばしてゐる。かすかに光る絹の綿である。

「伯母をばさん」と云ふ。「まだ起きてゐたの?」と云ふ。「ああ、

今これだけしてしまはうと思つて。お前ももう寝るのだらう？」
と云ふ。後架こうかの電燈はどうしてもつかない。やむを得ず暗いまま
小便をする。後架の窓の外には竹が生えてゐる、風のある晩は葉
のすれる音がする。今夜は音も何もしない。唯寒い夜よるに封じられ
てゐる。

薄綿うすわたはのぼし兼ねたる霜夜しもよかな

七 菟集

僕は如何いかなる時代でも、菟集癖しうしふへきと云ふものを持つたことはな

い。もし持ったことがあるとすれば、年少時代に昆虫類の標本へうほんを集めたこと位であらう。現在は成程なるほど書物だけは幾らか集まつてゐるかも知れない。しかしそれも集まつたのである。落葉の風だまりへ集まるやうに自然と書棚しよだなへ集まつたのである。何も苦心して集めた訣わけではない。

書物さへ既すでにさうである。況いはんや書画とか骨董こつとうとかは一度も集めたいと思つたことはない。尤もつともこれと思つたにしろ、到底たうてい我我売文の徒には手の出ぬせるでもありさうである。しかし僕の集めたがらぬのは必かならずしもその為ばかりではない。寧むしろ集めたいと云ふ氣持に余り快哉くわいさいを感じぬのである。或は集めんとする氣組みに倦怠けんたいを感じてしまふのである。

これは智識も同じことである。僕はまだ如何なる智識も集めようと思つて集めたことはない。尤も集めたと思はれるほど、智識のないことも事実である。しかし多少でもあるとすれば、兎に角集まつたと云はなければならぬ。

蒐集家は情熱に富んだものである。殊にたつた一枚のマツチの商標しやうへうを手に入れる為に、世界を周遊する蒐集家などは殆ど情熱そのものである。だから情熱を軽蔑しない限り、蒐集家も一つせう笑に付することは出来ない。しかし僕は蒐集家とは別の鑄型いがたに属してゐる。同時に又革命家や予言者とも別の鑄型に属してゐる。僕はマツチの商標に対する情熱にも同情を感じてゐる。いや、同情と云ふ代りに敬意と云つても差支さしつかへない。しかしマツチの

商標の価値にはどちらかと云へば懐疑的である。僕は以前かう云ふ氣質を羞はづかしいと思つたことがあつた。けれども面皮めんぴの厚くなつた今はさほど卑下ひげする気もちにもなれない。――

八 知己料

僕等は当時「新思潮しんしつう」といふ同人雑誌どうじんざつしに楯たてこもつてゐた。「新思潮」以外の雑誌にも時時作品を発表するのは久米正雄一人ぎりだつた。そこへ「希望」といふ雑誌社から、突然僕へ宛てた手紙が来た。手紙には、五月号に間まに合ふやうに短篇を一つお願ひしたい。御都合ごつがふは如何いかがと書いてあつた。僕は勿論快諾くわいだくした。

僕は一週間たたない内に、「虱しらみ」といふ短篇を希望社へおくつた。それから——原稿料の届くのを待った。最初の原稿料を待つ気もちは売文の経験のない人には、ちよいと想像が出来ないかも知れない。僕も少し誇張すれば、直なほざむらひ侍を待つ三千歳みちとせのやうに、ふりかへ振替の来る日を待ちくらししたのである。

原稿料は容易に届かなかつた。僕はたびたび久米正雄と、希望社は僕の短篇にいくら払ふかを論じ合つた。

「一円は払ふね。一円ならば十二枚十二円か。そんなことはない。一円五十銭は大丈夫払ふよ。」

久米くめはかういふ予測を下した。何だなんかさう云はれて見れば、僕も一円五十銭は払つてもらはれさうな心もちになつた。

「一円五十銭払つたら、八円だけおごれよ。」

僕はおおると約束した。

「一円でも、五円はおごる義務があるな。」

久米はまたかういつた。僕はその義務を認めなかつた。しかし五円だけ割愛かつあひすることには、格別異存も持たなかつた。

その内に「希望」の五月号が出、同時に原稿料も手にはひつた。僕はそれをふところにしたまま、久米の下宿へ出かけて行つた。

「いくら来た？ 一円か？ 一円五十銭か？」

久米は僕の顔を見ると、彼自身のことのやうに熱心にたづねた。僕は何ともこたはずに、振替ふりかへの紙を出して見せた。振替の紙には残酷ざんこくにも三円六十銭と書いてあつた。

「三十銭か。三十銭はひどいな。」

久米もさすがになさけない顔をした。僕はなほ更ぶつちやう 仏頂ぶつちやう づらをしてゐた。が、僕等はしばらくすると、同時ににやにや笑ひ出した。久米はいはゆる微苦笑びくせうをうかべ、僕は手がるに苦笑したのである。

「三十銭は知己料ちきれうをさしひいたんだらう。一円五十銭マイナス三十銭——一円二十銭の知己料は高いな。」

久米はこんなことをいひながら、振替の紙を僕にかへした。しかしもうこの間のやうに、おごれとか何なんとかはいはなかつた。

九 妄問妄答

客 菊池寛きくちくわん氏の説によると、我我は今度の大地震だいのやうに命

も危いと云ふ場合は芸術も何もあつたものぢやない。まづ命あつての物種ものだねと尻端折しりはしよりをするのに忙いそがしさうだ。しかし実際さう云ふものだらうか？

主人 そりや実際さう云ふものだよ。

客 芸術上の玄人くろうともかね？ たとへば小説家とか、画家とか

云ふ、——

主人 玄人くろうとはまあ素人しろうとより芸術のことを考へさうだね。し

かしそれも考へて見れば、実は五十歩百歩なんだらう。現在頭に火がついてゐるのに、この火焰をどう描写しようなどと考へる豪が

うけつ
 傑はるまいからね。

客 しかし昔の侍などは横腹を槍に貫かれながら、辞世の歌を
 咏んでゐるからね。

主人 あれは唯名誉の為だね。意識した芸術的衝動などは別の
 ものだね。

客 ぢや我我の芸術的衝動はああ云ふ大變に出合つたが最後、
 全部なくなつてしまふと云ふのかね？

主人 そりや全部はなくならないね。現に遭難民の話を聞いて見給へ。思ひの外ほか芸術的なものも沢山あるから。——元來芸術的に表現される為にはまづ一応いちおう芸術的に印象されてゐなければならぬ筈だらう。するとさう云ふ連中は知らず識らず芸術的

に心を働かせて来た訣わけだね。

客 (反語的に) しかしさう云ふ連中も頭に火でもついた日にや、やつぱり芸術的衝動を失うことになるだらうね？

主人 さあ、さうとも限らないね。無意識の芸術的衝動だけは

案あんぐわい外せとぎは 生死の瀬戸際にも最後の飛躍をするものだからね？ 辞

世の歌で思ひ出したが、昔の侍の討うちじに死などは大たいてい抵たい戲曲的或は俳優的衝動の——つまり俗に云ふ芝居しばゐぎ気の表はれたものとも見られさうぢやないか？

客 ぢや芸術的衝動はどう云ふ時にもあり得ると云ふんだね？

主人 無意識の芸術的衝動はね。しかし意識した芸術的衝動はどうもあり得るとは思はれないね。現在頭に火がついてゐるのに、

……

客 それはもう前にも聞かされたよ。ぢや君も菊池寛きくちくわん氏に全然さんせい賛成してゐるのかね？

主人 あり得ないと云ふことだけはね。しかし菊池氏はあり得ないのを寂しいと云つてゐるのだらう？ 僕は寂しいとも思はないね、当り前だとしか思はないね。

客 なぜ？

主人 なぜも何もありません。命あつての物種ものだねと云ふ時にや、何も彼も忘れてゐるんだからね。芸術も勿論もちろん忘れる筈ぢやないか？ 僕などは大地震どころぢやないね。小便のつまつた時にさへレムブランドもゲエテも忘れてしまふがね。格別その為

に芸術を軽んずる気などは起らないね。

客 ぢや芸術は人生にさ程痛切なものぢやないと云ふのかね。

主人 莫迦ばかを云ひ給へ。芸術的衝動は無意識の裡うちにも我我を動かしてゐると云つたぢやないか？ さうすりや芸術は人生の底へ

一面深い根を張つてゐるんだ。——と云ふよりも寧むしろ人生は芸術の芽めに満ちた苗なへどこ床なんだ。

客 すると「玉は砕くだけず」かね？

主人 玉は——さうさね。玉は或は砕けるかも知れない。しかし石は砕けないね。芸術家は或は亡びるかも知れない。しかしつか知らず識らず芸術的衝動に支配される熊くまさんや八はちさんは亡びないね。

客 ぢや君は問題になつた里見さとみ氏の説にも菊池きくち氏の説にも部分的には反対だと云ふのかね。

主人 部分的には賛成だと云ふことにしたいね。何しろ両雄のはざ挟み打ちを受けるのはいくら僕でも難渋だからね。ああ、それからまだ菊池氏の説には信用出来ぬ部分もあるね。

客 信用の出来ぬ部分がある？

主人 菊池氏は今度大おほむか向うからやんやと喝かつさい采さいされる為にはうそ嘘が必要だと云ふことを痛感したと云つてゐるだらう。あれは余り信用出来ないね。恐らくはちよつと感じた位だね。まあ、もう少し見てゐ給へ。今に又何かほんたうのことをむきになつて云ひ出すから。

十 梅花に対する感情

この ज्याアナリズムの一篇を謹厳なる西川英次郎君に献ず

予等よらは芸術の士なるが故に、如によじつ実に万象を觀みざる可べからず。少くとも万人の眼光を借らず、予等の眼光を以て見ざる可らず。古來偉大なる芸術の士は皆この独自の眼光を有し、おのづから独自の表現を成せり。ゴツホの向日葵ひまはりの写真版の今日こんにちもなほ愛あいぐわ翫あせらるる、豈あに偶然の結果ならんや。(幸ひにGOGGHをゴツホと呼ぶ発音の誤りを咎とがむること勿れ。予はANDERSENを

アナアセンと呼ばず、アンデルゼンと呼ぶを恥ぢざるものなり。）

こは芸術を使命とするものには白日はくじつよりも明らかなる事実なり。然れども独自の眼を以てするは必しも容易かならずの業わざにあらず。

（否、絶対に独自の眼を以てするは不可能と云ふも妨げさまたざる可し

。）殊ばんにんに万人の詩に入ること屢しばしばなりし景物を見るに独自の眼光

を以てするは予等の最も難しとする所なり。試みに「暮春ぼしゆん」の

句を成すを思へ。蕪村ぶそんの「暮春」を詠えいぜし後のち、誰か又独自の眼光

を以て「暮春」を詠じ得るの確信あらんや。梅花の如きもその一

のみ。否、正にその最たるものなり。

梅花は予に伊勢物語いせものがたりの歌より春信はるのぶの画ゑに至る柔媚じうびの情を想

起せしむることなきにあらず。然れども梅花を見る毎ごとに、まづ予

の心を捉とらふるものは支那に生じたる文人趣味ぶんじんしゆみなり。こは啻ただに予
 のみにあらず、大方おほかたの君子くんしも亦然またるが如し。(是ここに於て乎か、中
 央公論記者も「梅花の賦ふ」なる語を用ゐるならん。)梅花を唯愛
 すべきジエヌス・プリヌスの花と做なすは紅毛碧眼こうまうへきがんの詩人のこ
 とのみ。予等は梅花の一瓣つるにも、鶴おもを想ひ、初月しよげつを想ひ、空くうぎ
 山んを想ひ、野水やすみを想ひ、断角だんかくを想ひ、書燈しうちくを想ひ、脩竹しうちくを
 想ひ、清霜せいさうを想ひ、羅浮らふを想ひ、仙妃せんぴを想ひ、林処士りんしよしの風流
 を想はざる能あたはず。既に斯すでくの如しとせば、予等独自の眼光かならずを以
 て万象を觀んとする芸術の士の、梅花に好意を感じざるは必しも
 怪しむを要せざるべし。(こは夙つとに永井荷風ながるかふう氏の「日本の庭」の
 一章たる「梅」の中に道破せる真理なり。文壇は詩人も心臓以外

に脳髓を有するの事実を認めず。是予これに今日こんにちこの真理を盗用せしむる所以ゆゑんなり。）

予の梅花を見る毎ごとに、文人趣味を喚よび起さるるは既に述べし所の如し。然れども妄みだりに予を以て所謂いはゆる文人と做すこと勿なかれ。予を以て詐偽師さぎしと做すは可なり。謀殺犯人と做すは可なり。やむを得ずんば大学教授の適任者と做すも忍ばざるにあらず。唯幸ひに予を以て所謂いはゆる文人と做すこと勿なかれ。十便十宜帖じふべんじふぎてふあるが故に、大た雅いがと蕪村ぶそんとを並へいしやう称するは所謂文人の為す所なり。予はたとひ宮きゆうせらるると雖いへども、この種の狂人と伍することを願はず。

ひとり是のみに止とどまらず、予は文人趣味を輕蔑するものなり。殊くわせいどに化政度ふうかうに風行ふうかうせる文人趣味を輕蔑するものなり。文人趣味

は道楽のみ。道楽に終始すと云はば則ち已まん。然れどももし道
 楽以上の貼札はりふだを貼らんとするものあらば、山陽さんやうの画ゑを觀せし
 むるに若かず。日本外史にほんぐわいしは兎も角とかくも一部の歴史小説なり。画に
 至つては呉ごか越ゑつか、畢つひにつくね芋いもの山水のみ。更に又竹田ちくでんの百
 やくくわつい活い矣いは如何い。これをしも芸術と云ふ可べくんば、安来節やすぎぶしも芸
 術たらざらんや。予は勿論彼等の道楽を排斥せんとするものにあ
 らず。予をして当時に生まれしめば、戯かれに河童晚歸かっぱばんきの図を作り、
 山紫水明楼上いつさんの一い祭まつりを博ひろせしやも亦また知る可べからず。且又彼等も
 聰明の人なり。豈あに彼等の道楽を彼等の芸術と混同せんや。予は常
 に確信す、大正の流俗、芸術を知らず、無邪気なる彼等の常じやうだ
 談たんを大真面目おほまじめに随喜かつがうし渴かつがう仰かうするの時、まづ噴飯ふんぱんに堪へざる

ものは彼等兩人に外ほかならざるを。

梅花は予の輕蔑する文人趣味を強ひんとするものなり、下劣げれつ詩魔しまに魅みせしめんとするものなり。予は子けつぜん然ぜんたる征旅きやくの客の深山しんざん大沢だいたくを恐るるが如く、この梅花を恐れざる可からず。然れども思へ、征旅の客の踏破の快を想見するものも常に亦深山大沢なることを。予は梅花を見る毎に、峨眉がびの雪を望める徐霞客じよかかくの如く、南極の星を仰げるシヤツクルトンの如く、鬱うつ勃ぼつたる雄心をも禁ずること能あたはず。

灰捨てて白梅うるむ垣根かな

加ふるに凡ぼんてう兆てうの予等の為に夙つとに津頭しんとうを教ふるものあり。予の渡江に急ならんとする、何ぞ少年の客氣かくきのみならんや。

予は独自の眼光を以て容易に梅花を觀難みがたきが故に、愈いよいよ独自の眼光を以て梅花を觀みんと欲するものなり。聊いささかかパラドックスを弄ろうすれば、梅花に冷淡なること甚しきが故に、梅花に熱中すること甚しきものなり。高青邱かうせいきうの詩に云ふ。「瓊姿けいしたたまさにえうたいにあるべ只合在瑤台からうさつてよりかうえいな誰たれ向江辺かかうへん処しよ処よ裁にむか」又云ふ。「自去何郎無好し詠し」東風とうふう愁寂しうせき幾回開いくくわいかひらく「真に梅花は仙人の令嬢か、金持の隱居かこの圜かこひものに似たり。(後者は永井荷風ながあかふう氏の比喩ひゆなり。かならず必しも前者と矛盾むじゆんするものにあらず)予の文に至らずとせば、斯かる美人に対する感慨おもを想へ。更に又汝の感慨にして唯ほればれとするのみなりとせば、已やんぬるかな、汝も流俗のみ、濟度さいどす可からざる乾屎橛かんじけつのみ。

十一 暗合

「お富とみの貞操」と云ふ小説を書いた時、お富は某氏夫人ではないかと尋ねられた人が三人ある。又あの小説の中に村上新一郎むらかみしんぎぶらうと云ふ乞食こじきが出て来る。幕末に村上新五郎と云ふ奇傑がゐたが同どう一いち人か尋ねられた人もある。しかしあの小説は架空はなしの談だから、謂いふ所のモデルを用ゐたのではない。「お富の貞操」の登場人物はお富と乞食ふたりと二人だけである。その二人とも実在の人物に似てゐると云ふのは珍らしい暗合あんがふに違ひない。僕は以前藤野古ふぢのこ白はくの句に「傀儡師くわいらいし日暮れて帰る羅生門らしやうもん」と云ふのを見、「傀

備師」「羅生門」共に僕の小説集の名だから、暗合あんがふの妙に驚いたことがある。然るに今又この暗合に出合つた。僕には暗合たが崇たつてゐるらしい。

十二 コレラ

コレラが流行はやるので思ひ出すのは、漱石そうせき先生の話である。先生の子供の時分にも、コレラが流行つたことがある。その時、先生は豆を沢山たくさん食つて、水を沢山飲んで、それから先生のお父さんと一いつしよ緒よに、蚊帳かやの中に寝てゐたさうである。さうして、その明け方に、蚊帳の中で、いきなり吐瀉としゃを始めたさうである。する

と、先生のお父さんは「そら、コレラだ」と言つて、蚊帳を飛び出したさうである。蚊帳を飛び出して、どうするかと思ふと、何もすることがないものだから、まだ星が出てゐるのに庭を箒で掃き始めたさうである。勿論、先生の吐瀉としやしたのは、豆と水とに祟たられたので、コレラではなかつたが、この事があつたために、先生は人間の父たるもののエゴイズムを知つたと話してゐた。

コレラの小説では何があるか。紅葉こうえふの「青葡萄あをぶどう」とかいふのが、多分、コレラの話だつたらう。La Motteといふ人の短篇に、日本のコレラを書いたのがある。何も際立きはだつた事件はないが、魚う河岸をがしの暇になつたり、何かするところをなかなか器用に書いてある。

僕はコレラでは死にたくはない。へどを吐いたり下痢をしたりする不風流な往生わうじやうは厭いである。シヨウペンハウエルがコレラを恐こはがつて、逃げて歩いたことを讀んだ時は、甚だ彼に同情した。ことに依ると、彼の哲学よりも、もつと、同情したかも知れない。

しかし、シヨウペンハウエル時代には、まだコレラは食物から伝染でんせんするといふことがわからなかつたのである。が、僕は現代に生れた難有ありがたさに、それをちゃんと心得てゐるから、煮たものばかり食つたり、塩酸レモナアデを服のんだり、悠悠と予防を講じてゐる。この間、臆病すぎると言つて笑はれたが、臆病は文明人のみの持つてゐる美德である。臆病でない人間が偉ければ、ホツ

テントツトの王様に三^{さん}拜^{ばい}九^{きゅう}拜^{はい}するがいい。

十三 長崎

菱^{ひしがた}形の^{たこ}凧。サント・モンタニの空に揚^{あが}つた^{たこ}凧。うらうらと幾

つも漂^{ただよ}つた^{たこ}凧。

路^{あきな}ばたに商^{あきな}ふ夏蜜柑やバナナ。敷石の日ざしに火^ほ照^てる^けはひ。

町一^つぱいに飛^{つばめ}ぶ^め燕。

丸^{まる}山^{やま}の廓^{くるわ}の見返^{みかへ}り柳。

運河には石の眼^{めがね}鏡^{ばし}橋。橋には往^{わう}来^{らい}の麦^{むぎ}稈^{わら}帽^{ぼう}子。——忽^とち

泳^{およ}いで来^{あひ}る家^{あひ}鴨^るの一^むれ。

白^{しろ}白^{しろ}と日^ひに照^てつた家^{あひ}鴨^るの一^むれ。

なんきんでら
南京寺の石段の蜥蜴。

中華民國の旗。煙を揚げる英吉利の船。「港をよろふ山の若葉

に光さし……」
顛頂の禿げそめた齋藤茂吉。ロテイ。沈南
嶺。永井荷風。

最後に「日本の聖母の寺」その内陣のおん母マリア。穂麦に
交じった矢車の花。光のない真昼の蠟燭の火。窓の外には遠
いサント・モンタニ。

山の空にはやはり菱形の凧。北原白秋の歌った凧。うら
うらと幾つも漂った凧。

十四 東京田端

時雨しぐれに濡ぬれた木木の梢こずゑ。時雨に光つてゐる家家の屋根。犬は炭

俵を積んだ上に眠り、鶏はひとかご一籠ひとかごに何羽もちつとしてゐる。

庭木に鳥からすうり瓜の下つたのはいも鑄物師香取秀真の家。

竹の葉の垣に垂れたのは、画家こすぎみせい小杉未醒の家。

門内に広い芝生しばふのあるのは、長ちやうじや者鹿島龍蔵の家。

ぬかるみの路みちを前にしたのは、俳人滝井折柴の家。

踏石ふみいしに小笹こささをあしらつたのは、詩人室生犀星の家。

椎しひの木や銀杏いてふの中にあるのは、——夕ぐれ燈籠とうろうに火のともる

のは、茶屋てんねん天然自笑軒。

時雨しぐれの庭を塞ふさいだ障子。時雨の寒さを避ける火鉢。わたしは紫し

檀たんの机この前に、一本八錢の葉卷はを啣くはへながら、一游亭いちいうていの鶏けいの画ゑを眺めてゐる。

（大正十一年—十三年）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

続野人生計事

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>